編集後記

ここに東アジア世界史研究センターの『年報』第2号をお届けする。

オープン・リサーチ・センター整備事業として、私たちのプロジェクト「古代東アジア世界史と留学生」が採択されて2年目が終わろうとしている。本センターでは、プロジェクト開始当初から、日本から唐への留学生を基点として、さらにそれを東アジア、つまり朝鮮半島・日本列島などの地域に存在したであろう留学生に対象を広げ、その留学生について、それぞれの地域の国家が、それぞれの社会の如何なる人物を派遣したのか、その目的は何で、実際に各地域にもたらされたものは何であったか、その交流によってそれぞれの社会はどう変化したのか、などの諸点を具体的に見つめることで、東アジア世界史を新たに構造化できないだろうか、との問題意識をもっていた。昨年度に開催された第1回シンポジウムの討論において展開された、東アジア世界史の有効性の有無、あるいはその有効性において留学生の果たした役割は如何なるものであったのか、といった論点は、本プロジェクトにおける私たちの研究の方向性を示唆するものとなった。

一つは留学生がもたらした具体的なものと、それが意味したことに対する追究で、これは、本誌に掲載されている、本年度の第2回公開講座の講演にあらわれている。たとえば中村氏の留学生の通った道・河川・運河や留学生の滞在状況、あるいは栄原氏の留学生派遣と中央官界における政治史との関連、さらには渡辺氏の唐の音楽を導入して雅楽が成立したことや、国家史の観点から音楽（雅楽）のもつ意味の重要性を指摘する研究は、いずれも刺激的であった。

いま一つの、東アジア世界史像に対する追究は、これも本誌に掲載されている、本年度の第2回国際シンポジウムの諸報告と討論に、その研究方法の端緒を見出すことができたように思う。すなわち、唐を中心として各国に放射線状に伸びる線の上での往復運動（冊封体制や留学生の流れ）と考えられていた従来の東アジア世界史論に対して、唐を中心とした同心円の円周上の交流・移動、すなわちともに留学生を出す側の間（「東夷」間）での交通を（これを担った者も留学生として）問い直すことが、新たな東アジア世界史の有効性を見出す可能性をもっているのではないか、ということである。果たして、この研究視角は、拡がりをもつのだろうか。

ともあれ、昨年度の研究成果をもとに定めた私たちの研究プロジェクトの方向性に、真正面から取り組んでいただき、本年度の第2回公開講座のご講演、第2回国際シンポジウムのご報告をお引き受けいただいた諸先生に、この場を借りて感謝申し上げたい。また当日参加していただいた皆さんも、多くの質問をお寄せいただき、討論を活発なものにしていただいたことに対して、お礼を申し上げたい。さらに来年度にむけての第2回研究会も開催することができた。この開催のために直接ご助言いただいた皆川雅樹氏にも感謝申し上げたい。

あらためて、この『年報』に対しても、またこの研究プロジェクトに対しても、忌憚のないご批判をお寄せいただければ幸いである。

ではまた来年度も、この方向性からの議論を続けます。公開講座・シンポジウム・研究会へのご参加をよろしくお願いいたします。

（飯尾秀幸）